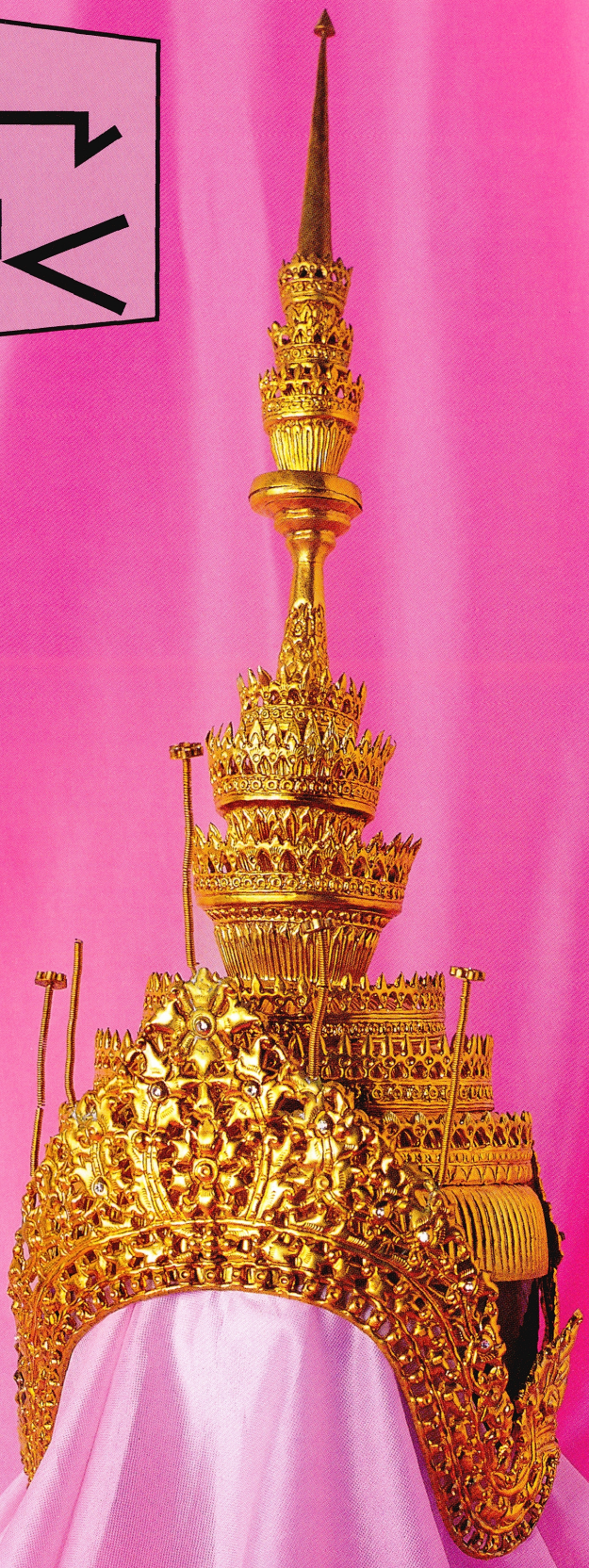
月刊
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成19年5月1日発行　第31巻第5号通巻第356号

みんぱく

国立民族学博物館
2007
5



特集 ダンス

地の先へ。
知の奥へ。
みんぱく
30th
Anniversary

エッセイ

世界へ 世界から

ゴンザレス的海外旅行

ゴンザレス三上

元来、家のなかが好き。加えて、飛行機嫌いの旅嫌い。むかしから、一日中家にいて、音楽を聴いたりテレビを観たりゲームをしたりしてゴロゴロしているのがいちばん幸せ、な僕にとって、自ら望んで「世界の国々へ羽ばたこう!」なんて大志を抱いたことは一度もありません。

とはいえ、ゴンチチを始めてから、演奏旅行などで、ちょこちょこと外国へ行く機会が増えました。今年でデビュー二四年。思い返して数えてみると、今まで、かなりの回数、海外に出かけています。

もっとも、プライベートで行ったことは一度も無く仕事ばかりです。いわゆる、仕事で行く海外ですから、どちらかと言うと、自費を捻出して、強い期待に胸膨らませて行くというのとはちょっと様相が違います。なので、当地に着いても、比較的冷静なものです。それに事前勉強などして当地の知識に長けているなんてこともなく、また有名スポットもわからず、ただ、仕事以外のちょっとした空き時間に町をさまよう程度の海外旅行なのです。旅行好きの方からすれば、言語道断、まったくもって、もったいない、けしからん旅行者なのかもしれません。

けれど、反論する訳では無いですが、何の期待も無く、何の知識も無い、ということを逆にとらえれば、それは、まったく偏見無しに旅行できる、ということでもあります。つまり、事前準備の無い分、その驚きと感動の度合いは相当なものです。だから、南仏からTGV（高速列車）に乗り、パリに向かう車窓で、まるでルーブルの美しい絵画（それ以上ですが）のような景色が数珠繋ぎになって延々と続くのを見たときは、あまりの美しさに本当に膝が震えましたし、スペインはバルセロナの、有名なガウディの建物のあいだからのぞく、美しい陽光と青い空を見た瞬間は、もうここで命果てても仕方無し、と思えるほど純粋に感動することができたのでした。

海外旅行を偉そうに語れる資格なんてまったく無い僕が言うのも変ですが、「世界は広い、見たことも無い美しい場所が無数にある」ということだけは言えそうです。そしてそういうさまざまに美しい無数の場所に住む人びとと出会うというのも、海外の旅のもっとも重要な要素、醍醐味かもしれません。

さて、ここ数年、僕は新幹線から時折見える、富士山の雄大で美しい姿に心惹かれています。ひょっとして、海外の美しい景観を見ていなかったら、僕は、富士山の美しさにたどり着かなかったのかもしれません。

皮肉なことに、本当の日本の美は、海外の景色の向こうにありました。人は自分の国を知りたくて、世界に向かうのかもしれません。

ごんざれすみかみ／1953年大阪生まれ。ギタリスト。ギターデュオ「ゴンチチ」として広く知られる。CGやグラフィックデザイン分野でも独自の活動を展開。著書に『犬と暮らす人の生活』（メディアファクトリー）。最新ソロアルバムに「green shadow, white door」（In The Garden Records）がある。

月刊 みんぱく

目次

MAY 2007
月刊みんぱく 5

01 エッセイ 世界へ世界から
ゴンザレス的海外旅行
ゴンザレス三上

02 特集 ダンス
「社交ダンス」の風景
永井 良和
村のダンスと舞踊団
遠藤 保子
舞踊の伝承
福岡 まどか

鳥になる
甲地 利恵
「ヨガック」でもてなし
久保田 亮
踊り継がれる「スイカ・ダンス」
丸山 淳子

08 モノ・グラフ
飛行祈願 ―機械文明と呪具舞踏―
近藤 雅樹

10 地球ミュージアム紀行
死海を望むミュージアム
日高 真吾

11 表紙モノ語り
クメール舞踊の冠
福岡 正太

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
タッチからタッチングへ
廣瀬 浩二郎

15 時論・新論・理想論
漫画漫談―独逸編
山中 由里子

16 外国人として生きる
日本でのムスリム
エルハジマブルク 友美

18 地球を集める
聖母マリアとヒツジたち
新免 光比呂

20 生きもの博物誌
ウサギのいる風景
田口 洋美

22 フィールドで考える
赤い土、白い砂、青い陶器
菊田 悠

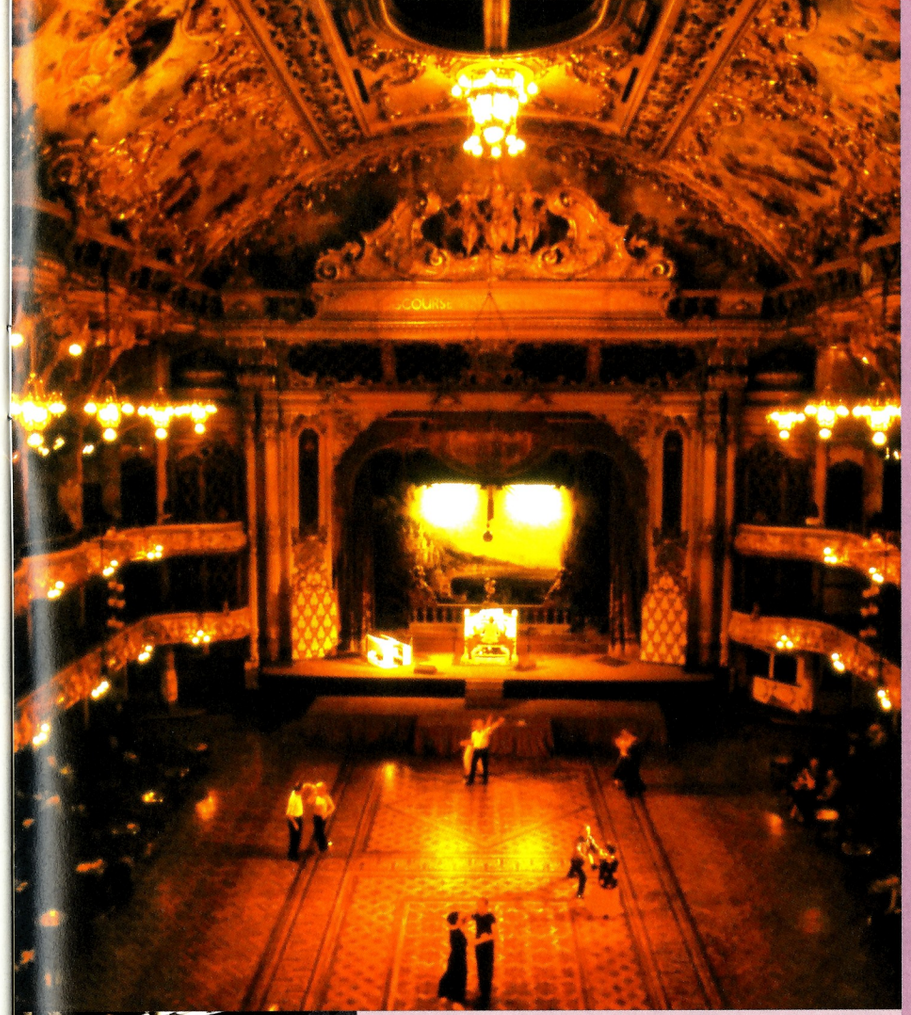
24 開館30周年記念事業
みんぱく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ

特集

ダンス

ダンスをもたない民族はいないだろう。時代が変わってもダンスは人類の基本行動のひとつである。近年、新しいダンスが流行ったり、消えゆく伝統舞踊を国が保護するなど、事情は多様である。特集では、ダンスの変わりゆく役割や継承について考えたい。

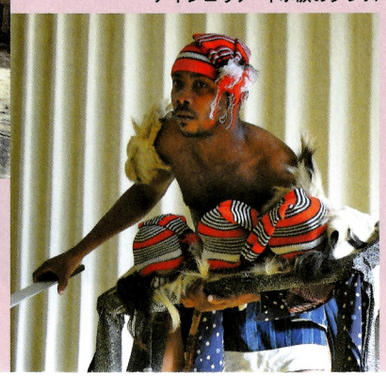


邦画「Shall we ダンス？」にも登場した、イギリスの「タワーボールルーム」

インドネシア・ジャワ島の仮面舞踊

アイヌの鶴の舞（北海道アイヌ古式舞踊連合保存会所蔵）

ナイジェリア・イボ族のダンス



「社交ダンス」の風景

永井 良和
（ながい よしかず）
関西大学教授

高齢者のあいだでブームに

郊外の住宅地にある公民館を覗いてみると、踊る高齢者たちの姿を見つけることがしばしばだ。男女が身体を接触させて踊るタイプのダンスが中高年のあいだでブームになって、二〇年あまりになる。高齢化もすすんだが、そのぶん、愛好者は昼の時間帯にも活動の領域を拡大した。高齢者がダンスを趣味として再認識したのは、健康の維持はもちろん、リスクの低い性的コミュニケーションの実現が図れるからである。ダンスなど軟派の遊びだという偏見も弱まった。かくして、郊外の公民館は、都心のダンスホールさながらの活況を呈することになった。

彼ら彼女たちが踊るダンスは、「社交ダンス」とよばれることが多い。しかし、social danceということば本来の意味の広がりのなかにおいて考えると、公民館のダンスは種類も機能も限定されている。そこで採用されているのは、足の運びや型の接続パターンなどの標準が定められた競技タイプのものが中心だ。テレビの人気社交ダンス番組で踊られているものも、多くはこの流れにある。練習して上達するには、特定のパートナーと組むほうが能率的なので、社交のために「パートナー・チェンジ」をする習慣がおろそかになることさえある。もっと、音楽を楽しみながら踊る人たちが増えればよいのだが。

近代化とともに

ところで、日本で踊られている「社交ダンス」は、ロンドンに総本山をおく「ボールルーム・ダンス」の流れを汲む。お察しのとおり、大英帝国の遺物なのだ。

競技会やパーティで踊られるボールルーム・ダンス一〇種目を見ると、いくつかはヨーロッパ起源のものだが、タンゴやルンバなどラテンアメリカの文化からとり込まれたダンスも含まれている。二〇世紀になって、ヨーロッパに輸入された異民族の音楽と舞踊は、西欧人によって編集され加工された。やがて、それらのダンスは、〈近代化とはすなわち西欧化である〉という考えを受け容れた国々へと輸出されていったのである。日本でも、〈英国風の本格的なダンス〉としてハイカラ人種の心を弾ませた。

今のわたしたちは、民族の音楽や踊りを、現地で直接に見聞し、あるいは体験する機会に恵まれている。しかし、かつては、数少ない旅行者が自分自身の身体を媒体として、異文化の踊りを伝えるしかなかった。また、身体運動を文字やイラストによって写しとり、読者がそれらの情報を身体運動に逆変換して再現したのだった。細かいテクニックにも誤りは少なくなかったし、もともとの文脈から切断された音楽やダンスについての理解には限界があった。

それから一〇〇年近くの歳月が流れようとしている。〈イングリッシュ・スタイルのキューバン・ルンバ〉を、桜の国の老人たちがにこやかに楽しんでいる。昼下がりの公民館の、ゆったりとした情景は、この世界が経験した一世紀の歴史の縮図でもある。

ハリウッド版「Shall we ダンス？」公開にちなみ、大阪ドームでおこなわれたタンゴのデモンストレーション

関東州・大連では日本人が社交舞踊を普及させた。ルンバやパソドブレも踊られた

村のダンスと舞踊団

遠藤 保子
（えんどう やすこ）
立命館大学教授

変化するダンス

二〇〇一年、わたしはダンスの調査のために二〇年ぶりにナイジェリアへ行った。ラゴス市内は、蒸し暑く、ビルが林立（りんりつ）し、道路際では農産物等の露天商が営まれ、自動車が渋滞し、排気ガスが漂い、その車を縫ってカラフルな服を着た人びとが運転手に日用品等を売りつけていた。この光景は二〇年前と同じである。が、変わった点もある。飲み干した飲料水のビニール袋があちこちに捨てられていることだ。「ごみ箱に捨ててよ」と思いながらも、これは人びとが衛生的な飲料水を廉価に飲めるようになった証であり、不衛生な水を飲んでいたむかしに比べると「ずいぶん進歩したなあ」と感じる。

変わった点は他にもある。ラゴスから北へおよそ三〇〇キロメートル離れたオヤン村では、神に感謝し祈りを捧げるために、また先祖を供養するためにさまざまな祭りがおこなわれていた。しかし、今日ではそれがとりやめになり、当然ながら祭りにおける伝統的なダンスも踊られなくなっていた。なぜなら、あらたに就任した王がイスラム教徒であるため、伝統的な宗教にかかわる祭りを排除したからである。他の地方においても同じように、さまざまな理由によって伝統的なダンスが踊られなくなっている、といわれている。

消えゆく伝統の保存

一九八九年、ナイジェリア国立舞踊団が設立され、伝統的なダンスをベースにした、劇的・娯楽的なダンス公演がおこなわれている。その設立のきっかけは、一九七七年ナイジェリアが世界のアフリカ芸術・文化フェスティバルの主催国になり、さまざまな国々の舞踊団を一堂に会したことを機に、諸外国でナイジェリアのダンスを披露する必要性が出てきたからである。その後政府は、一九八八年の文化政策のなかで、国家は音楽、ダンス、演劇等をフィルム、オーディオテープ、ビデオ、文献資料として記録・保存すべきであること、またそれら三者をレパートリーとする舞踊団を結成すべきであること等を掲げ、翌年誕生した。この背景には、前述したように消滅しそうな伝統的なダンスの今日的状況がかかわっている、と考えられる。

現在、わたしは共同研究者とともにナイジェリアの代表的なダンスであるハウサ族のカブル、ヨルバ族のバタ、イボ族のイリアハ等をモーションキャプチャにより記録・保存し、ダンスを解析している。これは、三次元CGによって再現表示することができるため、ダンス特性の抽出やダンサーの演技力分析等に有効である。二〇〇六年には、わたしはラゴスで研究の一部を発表し、地元の新聞やテレビでも高く評価された。消えつつあるダンスの保存に役に立っているのではないかと実感した。

ヨルバ族のダンス、バタ。
雷の神シャンゴのダンス

ハウサ族のダンス、カブル。
五穀豊穣を祈願するダンス

モーションキャプチャ用の
スーツにマーカーをつけてもらうダンサー

特集 ダンス

舞踊の伝承

福岡 まどか
（ふくおか まどか）
大阪外国語大学准教授

舞台で衣装をつける踊り手

仮面舞踏の上演
（トゥムングンとジンガ・アノムの戦い）

特別な存在の踊り手

舞踊は、身体による表現であるが、その内容は日常的な行為そのものではない。日常的行為を高度に様式化した独特の身体動作によってなされる。こうした身体表現は、神あるいは信仰の対象などの目に見えない存在へ近づくひとつの手段である一方で、王や統治者の権力のような特別なパワーを象徴する役割も担ってきた。そして舞踊を演じる踊り手たちも、地域やジャンルによって違いはあるものの、技と力を備えた特別な存在として位置付けられている。

わたしの研究しているインドネシアのジャワ島では、さまざまな伝統的儀礼の際に舞踊や演劇を上演する。これらの芸能は儀礼を滞りなく終了させるために必要とされており、ときには特定の儀礼に不可欠の芸能が定められている場合もある。ジャワ島北部のチルボンには独特の仮面舞踊がある。仮面舞踊は、誕生、割礼、結婚などの人生のプロセスにかかわる儀礼、また、田植えや刈入れなどジャワのおもな生業である水稲耕作にかかわる儀礼に際して上演する。この舞踊は、複数の仮面を一人の踊り手が付け替えながら、それぞれの仮面があらわす「性格」を演じわけるというスタイルをもつ。特定の物語を上演することはないが、物語との関連も見られる。上演をおこなう踊り手たちは、踊り手としての系譜を引く人びとであり、彼らは、踊り手（あるいは影絵芝居の人形遣いや音楽家）の系譜のなかで、模倣と実践をとおして踊り手としての技を身に付ける。さらに、断食や瞑想などの修行をとおして内なる力も身に付けていくのである。

仮面舞踊の踊り手たちは、舞台上で独特な力を発揮すると信じられている。上演の際に近隣で赤ん坊が生まれると舞台上に連れてきて名前を依頼する、また病人が出るとその治療を依頼する、ということもあったと言われている。踊りに使う仮面にも特別な力があると信じられており、仮面に供物を捧げ、お香を焚いて祈ることもおこなわれる。仮面の裏側を削って煎じて飲むと病気に効くという話もある。

困難な育成

近年では、このような技と力をそなえた踊り手がなかなか育たない状況が見られる。その背景には、踊り手として生活することが経済的に困難な状況にあること、また踊り手の存在や特別な力に対する社会一般の共通理解が薄れつつあること、などの要因がある。芸術大学などで舞踊を学ぶ生徒がいる一方で、伝統的な社会のなかで踊り手を育成することは難しくなっている。実践的に上演を体験し、模倣を繰り返しながら技を身に付けるやり方は、一見すると効率の悪い学び方に思えるかもしれない。しかし、こうした習得方法によって、ジャワの踊り手たちは舞踊の技とともにさまざまなしきたりや専門的知識を身に付けていくことができたのである。これは踊りに限らず、伝統工芸などの分野でも同様である。ジャワの踊り手たちが直面している伝承問題は、日本をはじめ世界の各地で伝統的な技の継承者たちが直面している問題でもある。

特集 ダンス

鳥になる

甲地 利恵
（こうち りえ）

北海道立アイヌ民族文化研究センター
研究課 研究職員

白老民族芸能保存会による「サロルン・チカプ・リムセ（鶴の舞）」（北海道アイヌ古式舞踊連合保存会所蔵の写真）

谷元旦「エゾ人鶴舞図」（函館市中央図書館蔵）

アイヌの伝統的な踊りのジャンルのひとつに、動物のしぐさなどを写実的に模倣するものがある。なかでも鳥を模した踊りは地域ごとに多様なレパートリーが伝承されている。袖口をもって服をつっぱり羽ばたく。衣服の裾を背面でもち上げ優雅に羽ばたく。軽やかに跳びはねながら交差する軌跡を描く。歌いながら踊るその歌には巻き舌の音が挿入される。これは鳥の鳴き声だ。動きは簡素だが、ときに烈しくときに優雅に、短い動きを繰り返す。繰り返しのなかで、踊り手は無心に鳥になる。

伝統的なアイヌ文化では一般に、ひとつひとつの動植物や自然現象がそれぞれカムイ（神）であり人間界にそうした姿をとって訪問してきた、と考える。そのカムイを模倣するという、それぞれの踊りの淵源はともかく、絶妙なカムイのしぐさやカムイの鳴き声を、現在の伝承のなかにもわたしたちは見ることができる。

近年の舞台での上演のなかでも、こうした踊り各種が披露される。観客のための解説も必要になる。「これはこれこれの情景を表現した踊りです」「こんな意味があります」という語り口も増える。もちろん、それは古老の話に基づいていたり、伝承者らが自ら古い資料を紐解いてえたものであり、決して間違いではない。ただ、舞踊が作品単位で観念的な何かを表現するという考え方は近代西洋芸術の個性主義のそれのようで、何となくそぐわないような部分があるようにも、わたし自身は感じる。親子鶴の情愛だの鳥の美しさを惜しむ猟師だの、それはそれで現代のわたしたちにはわかりやすいが、眼前に繰り広げられるアイヌの歌や踊りに内在する力は、何かを表現しようという自意識の前に、外なるもの（動物、自然）との境界を越えてまず踊り手が鳥に「なる」ことを促しているように思えるのだが。

踊る人の実感、観る人の印象、時代の流れ、舞踊の変容。さまざまに揺れながらも、確かな「意味」はアイヌの人びとが踊り、伝えていることのなかに存在し続けている。

「ヨガック」でもてなし

久保田 亮
（くぼた りょう）

東北大学大学院
文学研究科

男性の演技には力強さが、女性の演技にはしなやかさが求められる

「ヨガック」とは、アラスカ州南西部をホームランドとするチュピック（エスキモー）に伝わるダンス・スタイルである。ダンサーはドラマーが刻むリズムと歌の旋律に合わせてさまざまな物語を写実的に表現する。それぞれのヨガックが伝える物語は狩猟・漁撈活動から人びとに人気のバスケットボールにいたるまでの、彼らにとって当たり前の情景やそのときどきに経験した出来事を題材としている。

チュピック社会では、毎年新しいダンスを創作しては近隣村落住民を招待する祭りで演じることが慣例となっており、毎年数曲ずつ彼らの演目は増えていく。そのため人びとはその年の新曲を覚えることに余念がない。しかしその一方で、それ以前に創作された「懐メロ」を演ずることには驚くほど関心を示さない。

この点はヨガックが観客に対する「もてなし」であることと深く関係する。同じ演目を毎年繰り返して披露するのではなく、演目を毎年新しくすることが、エンターテイメントとしてのヨガックの価値を高めることに通じるのである。さらに新曲を発表することに加え、観客を楽しませるためのさまざまな趣向を凝らしながら人びとはヨガックを披露する。即興でコミカルな振り付けを織り込んだり、ピエロのゴムマスクをかぶって踊ったり、フラダンスの衣装を身にまといながらも神妙な顔つきで踊ったり、おどけた表情のままエネルギッシュに演技したりするダンサーの姿に観客は爆笑する。そんなときには決まって「アンコール！」の声が観客からかかる。するとダンサーたちは汗だくでヘトヘトになりながらも、より速いテンポでヨガックを踊ることで観客の要望に応える。

こうしたもてなし方はむかしから受け継がれてきた作法である。かつて人びとは、動物の霊を招待してはあらたに創作したヨガックを披露してもてなしたという。その観客たちもまた新曲に耳を傾け、演技に顔をほころばせていたに違いない。

踊り継がれる「スイカ・ダンス」

丸山 淳子
（まるやま じゅんこ）

京都大学アジア・アフリカ地域研究
研究科助教

カラハリの砂を蹴散らし、野生のスイカを順に投げ渡す「スイカ・ダンス」。誰かがスイカを受け損ね、踊りの輪が崩れたとたん、笑い声と歓声が響き渡った。サン（ブッシュマン）の人びとが遊動的な狩猟採集生活を営んでいたころから伝わるこの踊りを、政府の設けた定住地で育ち、その生活になじみの薄い若者たちが踊っている。

じつは、彼女たち、隣町で開催される「トラディショナル・ダンス・フェスティバル」に向けて練習を重ねているのだ。いわゆる文化保全や観光振興を目的に、ボツワナ共和国では最近、「トラディショナル・ダンス」のイベントが盛んに催され、サンの若者たちのダンス・グループも、こぞって参加する。「トラディショナル」とはいえ、観客に見せるために工夫が凝らされ、またこの国の人口の大多数を占めるツワナの歌や踊りもとりいれられる。この新しい踊りのスタイルを学校で学んだ若者たちは、そこへサンが古くから儀礼や治療のために踊ってきたものを融合させ、自分たちの演目を作っていくのである。

夕方、ダンス・グループの若者たちは、定住地の大きな木の下に集まって練習を始める。「スイカ・ダンス」など躍動感あるサンの踊りを巧みに織り交ぜて披露するこのグループは、これまでいくつものイベントで観客の目を釘付けにしてきた。賞金や褒賞を手にしたり、またメンバーの何人かは首都や国外で開催されるダンス・フェスティバルに出場したこともある。都会の学校を卒業した若者たちは、祖父母の作った毛皮の衣装や、ダチョウの卵で作ったビーズを身に付け、再び広い世界へとチャンスを探しにでかけていく。

しかし、練習らしい練習は、最初のうちだけ。甲高い歌声と手拍子を聞きつけた老人たちが集まり、恒例の「スイカ・ダンス」が始まる。老女が杖を放りだし、踊りの輪に飛び込む。お得意のポーズを決め、スイカをポンと高く後ろに投げやると、ヨーロッパに踊りを披露しに行ったこともある孫娘が、素早くそれを受けとり、美しいステップを見せる。カラハリのタベ、いくつもの踊りが折り重なって、サンの新しい生活を彩る。そして踊りは、世代をこえた関係をはぐくみ、より広い世界との架け橋になりつつある。

踊りながら、ソフトボール大のスイカを後ろ手で上手に投げるのは、けっこうむずかしい

モノグラフ

飛行祈願
―機械文明と呪具舞踏―

近藤 雅樹（こんどう まさき）
本館民族文化研究部

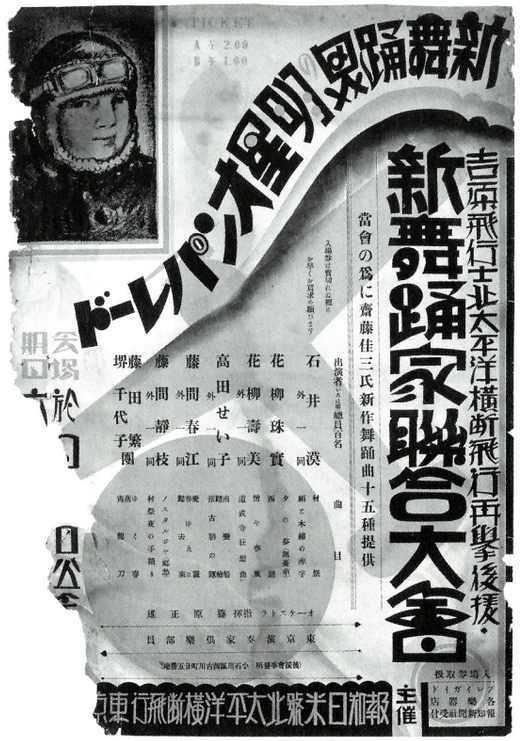
民族学の父、渋沢敬三が主宰した組織が収集した民具の調査中、偶然「飛行祈願文」と、関連する祈祷札類の束を見つけた。機械文明の先端をいく飛行機と伝統的な呪具。その奇妙なとりあわせがずっと気になっていた。今回、偶然が重なり各地で見出した関連資料によりこの一文を呈する。

昭和六（一九三一）年二月一一日、報知新聞社が主催して、同年の春に太平洋横断飛行に挑戦すると公表した。そして、同社内に寺田四郎副社長を委員長とする「横断飛行実行委員会」を設置した。

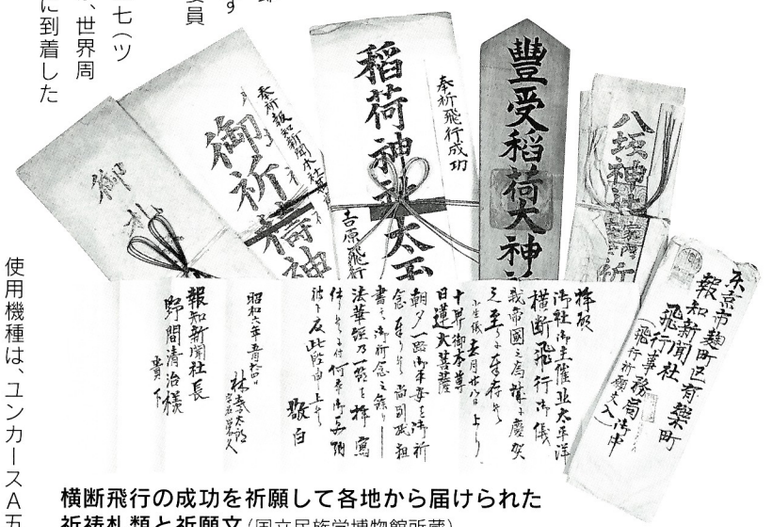
飛行船LZ一二七（ツェッペリン伯号）が、世界周航の途中に霞ヶ浦に到着したのが、約一年半前。

実用化されてまだ間もない飛行機による、この壮大な計画が成功すれば、日本人による初の快挙となる。

飛行計画の詳細は、翌日の『報知新聞』（夕刊）第一面の、ほぼ全面を使って紹介された。左頁の地図は、同紙に紹介された飛行計画経路である。東京の羽田沖から「桑港」つまりサンフランシスコまでの総飛行距離は、一万二一〇キロメートルとも表明された。



「吉原飛行士北太平洋横断　再挙後援　新舞踏家連合大会」ポスター
（東京藝術大学所蔵）
初挑戦はクリール列島の中間地点で頓挫したが、報知新聞社は予備の同型機も同時購入していた。吉原飛行士による不時着地点からの再挑戦に寄せる国民の期待は大きかった



横断飛行の成功を祈願して各地から届けられた祈祷札類と祈願文（国立民族学博物館所蔵）
日本人初の挑戦に意気高揚し、全国各地から報知新聞社内の事務局に届けられた祈祷札類の一部。封書（H27655）は宇都宮在住の林孝太郎から届いた。日蓮大菩薩に日夜横断成功を祈願していると披瀝（ひれき）した書状に「法華経」の一節の写経がそえてあった
（左よりH26036、H26038、H26039、H26046、H26049、H27655）＊収集年不明

使用機種は、ユンカースA五〇型ユニオール。単発・単葉二人乗りの水陸交替式軽飛行機だった。全金属製だが、掲載写真で明らかなとおり、乗員席はオープンで、風防設備はないに等しい。しかも、さらに軽量化をはかるため単座式に改造し、単独飛行を決行するというのである。

この計画に対して、時の日本政府は、一万円の国庫補助を与えた。全国各地からも、さまざまな団体や個人からの寄付金提供が相次いだ。なかには小学生からの寄付金もあったという。

この過酷な横断飛行に挑戦する操縦士には、同社専属の吉原清治（よしはらせいじ）一等飛行士が選ばれた。彼は、前年八月にやはり報知新聞社が主催した「日独親善欧亜連絡大飛行」に起用され、ベルリン―立川間をシベリア経由で飛来することに成功していた。そのときの飛行距離は、一万一〇九六キロメートル、所要飛行時間は八〇時間だった。その実績を買われての選抜だから、当然、国民の期待は大きかった。

北太平洋横断飛行の試みは、吉原機が初めてではない。欧米人によって何度も試みられていた。そして、日本側からの出発地点は、多くの場合、青森県三沢市周辺が選ばれていた。しかし、これまで日本から発進して成功した例はなかった。

吉原機の飛行計画路とは逆のコースをたどり、来日した飛行機はあった。大正一三（一九二四）年に、アメリカ海軍のスミス中尉らが搭乗してサンタモニカ飛行場を発進したダグラス社製四機のうち三機が霞ヶ浦に飛来したのである。太平洋横断飛行計画をトップ記事で報道した一二日の『報知新聞』も、彼らは三月一七日に出発し、五月二二日に飛来したと紹介していた。なんと、六七日間をかけての大遠征だったのだ。

もっとも、実際に彼らが要した飛行時間は、約八四時間だったという。しかも、四〇〇馬力のエンジンを搭載していた。対するに吉原機は八〇馬力というのだから、この横断飛行は無謀に思えるのだが、当時の日本国内はわきかえっていた。

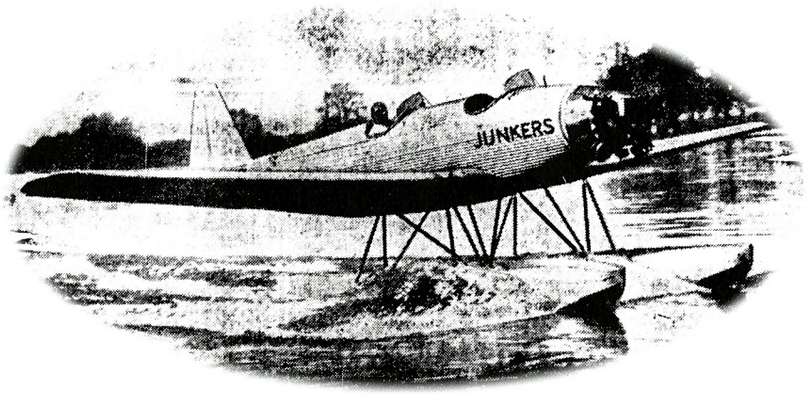
五月四日の朝は好天に恵まれ、大勢が参集した。そして、JOAKが実況放送するなか、声援の大合唱に送られ発進離水。やがて、機影は碧空（きくう）の彼方へと消えた。

羽田・根室間の飛行は順調だった。しかし、その先は悪天候とエンジントラブルのため飛行は難航した。それでも一四日にウルップ（得撫）島とチリホイ（知理保以）島を越えた。しかし…。

そこまでだった。

濃霧を避けて高度三〇〇〇メートルを維持していたら、突然、エンジンが停止してしまったのだ。やむなく滑空降下してシムシル（新知）島沖に着水した。

損傷した機体で漂流すること約七時間、幸い、吉原飛行士は無事に救助された。



「北太平洋横断飛行図」と「ユンカースA50ユニオール」
（昭和6年2月12日発行の『報知新聞』夕刊より）
諸所で着水給油しながらバンクーバーに達し、陸上発着機に改造してサンフランシスコを目指す計画だった。飛行時間は約77時間と想定。同型機の写真も公開された。一週間後、横浜に揚陸された同機は、小泉又次郎逓信大臣により「報知日米号」と命名された

羽田に集まった観衆の声援にこたえる機上の吉原清治一等飛行士
（CHARLES SCHWARTZ LTD PHOTOGRAPHY 所蔵
http://www.cs-photo.com/ より）
燃料輸送と機体の整備に備えて、報知新聞社は「第百国際丸」（約260トン）をベトロパブロフスクに派遣するなど周到に準備して挑んだ。しかし、見出し中に躍っていた「年中濃霧消えやらぬ世界第一の魔の空」で、吉原機は翻弄され続けた

地球ミュージアム紀行

死海資料館／ヨルダン

死海を望むミュージアム

日髙 真吾
（ひだか しんご）
本館文化資源研究センター

死海資料館は、日本の支援により、二〇〇六年一二月に開館した博物館で、「死海パノラマ・コンプレックス」の一角にある。考古・歴史博物館が一般的なヨルダンではめずらしく、自然史系（地質学）の博物館である。

展示場の様子を紹介しよう。最初は地理学のコーナーである。ここでは、ヨルダン各地から採取された多種多様な岩石標本を展示している。これらの標本はその表情もさまざまで美しく、鉱物の知識があまりなくても、十分に鑑賞できる。また、実際に触ったり、座ったりすることができる岩石標本も展示してあり、その質感や感触が楽しめるようになっている。コーナーの最後には、鉱物標本がひっそりと机の上においてあり、傍らには虫眼鏡。標本にマークされた部分を虫眼鏡でのぞくと、鉱石中にキラキラしているものが見える。この鉱物が金鉱石だったのである。

次は、植物と動物のコーナーである。ヨルダンの動植物の紹介と死海の特徴を展示している。展示場の真ん中に死海が生まれた地殻変動を解説する模型が展示され、死海誕生の秘密を知ることができる。死海の基礎知識をえた後、次に展開するのが、人間の営みと死海のコーナーだ。ここでは死海が人の暮らしにどのように役立っているのかについて、死海の成分を利用して作られた石鹸や泥パックの製造法などを紹介している。死海グッズは、エステ用品や入浴剤、調味料としての塩などヨルダンのお土産としても有名であるが、これらの商品を購入する前に、ここの博物館を訪れ、死海グッズの予備知識をぜひ入手してほしい。

最後は、危機に瀕した死海のコーナー。今、死海は一年に約一メートルずつ縮小しており、このままでは将来、干上がってしまうといわれている。その原因は、死海に流れ込むヨルダン川の水が飲食用、農業用、工業用水として大量に使われ、その水量を減らしていることにあるらしい。ここでは、死海保護の重要性を訴えるコーナーとなっている。

博物館を観覧し、展望台に出ると、眼前には美しい死海が一望でき、振り返るとモーセ終焉の地であるネボ山あたりを見ることができる。モーセはネボ山の頂きから死海の対岸にあるエルサレムへ赴く一行を見送ったと旧約聖書にはある。そんな歴史ロマンもこの博物館では感じることができるのだ。

死海資料館のある「死海パノラマ・コンプレックス」。ミュージアムショップやレストランも併設されている

金鉱石の標本。金の見える部分をマークしてあり、虫眼鏡で容易に観察できる

展望台より死海を望む。この場所から見る夕方の眺めは特に素晴らしい

学芸員の方による展示解説。今後は、来館した子どもたちへも積極的に展示解説をおこないたいとのこと

クメール舞踊の冠

女性用頭飾り（古典舞踊衣装）（標本番号H217132）カンボジア王国

■
福岡 正太（ふくおか しょうた）
本館文化資源研究センター
■

表紙の写真は、カンボジアの古典舞踊の女性役に用いる冠である。塔のように高く伸びた飾りが印象的である。踊り手は、冠、頭飾り、首飾り、腕輪、足輪などさまざまな装飾品と衣装を身に着けて踊る。古典舞踊には、男性、女性、魔物、猿の四つのおもなキャラクターのカテゴリーがあり、それぞれ特徴的な衣装や装飾品がある。ちなみに猿以外のキャラクターは、すべて女性の踊り手が演じるのが古典舞踊の特徴である。

このページの写真は、男性役と女性役の基本的な衣装と装飾品をマネキンに着付けたものである。衣装には、ボタンやホックの類は一切ついていない。着付けるたびに、針と糸で縫い合わせてとめていくのである。このやり方なら、踊り手の身体にぴったりと合わせてしっかりと着付けることができる。しかし、一人で衣装を着ることはできないし、着付けには大変手間がかかる。

カンボジアの古典舞踊の世界では、上演の前に必ずソンペア・クルーとよばれる儀礼をおこない、師や精霊あるいは芸能の神に対して祈りを捧げ、上演の無事を祈る。ソンペア・クルーをおこなうあいだは、舞踊に用いる冠や、魔物と猿役が頭からすっぽりとかぶる仮面を祭壇に並べ、供物をそなえ線香をあげる。衣装を着けた踊り手たちは、リーダーを先頭に祭壇の前に並んで座り、手を合わせる。この祈りが終わってはじめて、踊り手たちは冠や仮面をとってそれを身に着けるのである。

万国津々浦々

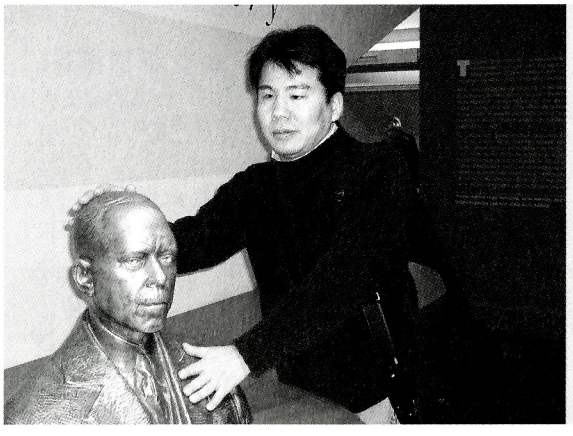
タッチからタッチングへ

廣瀬 浩二郎
（ひろせ こうじろう）
本館民族文化研究部

美術館の「さわる絵」

暖冬といわれた今冬だが、さすがに二月のシカゴは寒い。寒いというより痛い風を肌で感じるのも異文化体験だと思い、いつもの「百聞は一触に如かず」精神でシカゴにタッチする（さわる）フィールドワークを楽しんだ。今回は二週間のアメリカ出張だったが、各地でタッチング（感動的）な経験をすることができた。僕がシカゴに到着したのは、シカゴ・ベアーズがスーパーボウルで敗退した直後。スーパーボウル当日は、相手チームのタッチダウンに悔し涙を流すファンも多く、大荒れの街であったそうだが、滞在中は折からの寒さもあってか、静かな地方都市という雰囲気だった。

僕が最初に訪ねたのは、全米でも有数のコレクションをもつシカゴ美術館。事前に依頼していた職員の案内で、展示物にさわる「タッチ・ツアー」を満喫した。さわることができない絵画作品をどうやって視覚障害者に伝えるか。これは永遠の課題だし、日本でも近年いろいろな実験が試みられている。シカゴ美術館では各ギャラリーから代表的な絵画を選定し、それを凹凸化した「さわる絵」を用意していた。ガイドの解説を聞きながら「さわる絵」に触れると、想像力の乏しい僕もなんとなく作品の全体像をイメージすることができた。じつは、この「なんとなく」は重要で、「目が見えない＝絵は楽しめない」という常識を打破するために、これからも斬新な発想で「なんとなく」頑張っていきたいものだ。



「タッチ・ギャラリー」は小規模だが、各展示物には点字キャプションも付けられている

「タッチ・ギャラリー」

なんとなく絵画を味わうのも悪くないが、触覚の本領が発揮されるのは、やはり彫刻などの立体物の触察、触学だろう。シカゴ美術館には銅と大理石製の胸像を手で触れて鑑賞できる「タッチ・ギャラリー」があり、視覚障害の有無にかかわらず、すべての来館者にタッチングな触文化体験を奨励している。僕が訪れた日も、多くの子どもたちが展示物にさわって喜んでいた。日本でも彫刻作品にさわれる美術館が増えているが、アメリカを代表する大美術館に堂々と「タッチ・ギャラリー」が設置されているのには驚いた。

ギャラリーの解説パネルは、次の文言で始まっている。「このギャラリーは、『手で触れる』という行為が芸術鑑賞をいかに豊かにするものか、来館者に経験してもらう貴重なチャンスを提供します。触れることを通じて、人は芸術作品を形や線、サイズやスタイル、温度、素材といったもので識別できるようになります。それらは視覚だけでは感じることのできないものです」。

さて、今回の出張のメイン・イベントはシカゴ大学での講演。「The Richness of Touch」の演題で、昨年おこなった民博の企画展「さわる文字、さわる世界」の内容について、いつものブロークン英語で報告した。僕の話が大学のスタッフ、学生にとってタッチングなものだったかどうかはさておき、たくさんの研究者と出会い触れ合う有意義な場であった。そんな新しい友人と「Keep in touch!」（またね）と握手を交わし、僕は痛いシカゴを後にしたのだった。

時論
新論
理想論

漫画漫談―独逸編

山中 由里子
（やまなか ゆりこ）
本館民族文化研究部

ドイツのキオスクで

日本のアニメ、漫画の世界進出は、すでに一〇年以上も前から話題になっていることであるが、今や漫画は大都市の一部の好事家（こうずか）の趣味の対象におさまらず、年齢的にも地域的にもさらに幅の広い消費者層のあいだに浸透してきている。それを感じさせるのは、ドイツの地方都市のごく普通のキオスクにまで登場するようになった子ども向けのアニメ雑誌だ。三年ほど前から見かけるようになった。

ドイツで売られている日本のアニメ雑誌

これらのアニメ雑誌はアメリカのコミック誌のような全頁色刷りの薄いものだ。日本の電話帳形式を真似（まね）た分厚い漫画雑誌も本屋に行けばあるのだが、キオスクで売るには分厚すぎるようだ。興味深いことにこの電話帳形式の雑誌は、日本のさまざまな雑誌に連載されたシリーズをドイツで再編集しているようで、いわゆる少女漫画と少年漫画がごちゃまぜになっている。薄いアニメ雑誌は男の子用と女の子用の明らかなジェンダーわけがされている。

まずは、表紙にくっついているおまけが、子ども心をそそる。日本の「ふろく」は、厚紙を切り貼りして組み立てる、大人でも相当な器用さと忍耐を必要とする形式のものが多いが、ドイツの子ども雑誌のおまけは、プラスチック製の、たいがい一日で壊れるおもちゃが主流だ。一〇歳前後の少女がターゲットのYukiko誌のおまけは、アクセサリーや文房具、少年向けのMega Tiroには、ゲームカードなどが付いている。

中身はというと、例えばYukikoの場合、ドイツで放映されているアニメ――「犬夜叉」など日本では一昔前に流行ったアニメから、最近の「プリキュア」「名探偵コナン」まで――のキャラクターを配した占いや心理テスト、漫画の描き方の手ほどき、さらにドイツのコスプレ大会の様子のレポート（日本のコスプレを真似し、金髪少女が金髪のかつらをかぶって、アニメのキャラクターに扮する！）までが含まれている。これらに加え、日本文化の紹介の頁もある。例えば、日本人にとっての「花見」というイベントについて写真やアニメの一場面をとおして解説するといったものである。「サムライ」「イケバナ」のステレオタイプに固執しがちな、ドイツの博物館教育における日本文化紹介に比べるとはるかに現代的である。

アイデンティティの拠りどころ

日独国際結婚家庭の一〇歳になる娘、Mちゃんは Yukiko 誌を二〇〇四年の創刊号から熱心に読んでいる。どうもこのアニメ雑誌は、自分が半分日本人であるという自己意識の拠りどころになっているようだ。日本人の母親はそれをなんとも複雑な気持ちで見守っている。同じくドイツ在住のアフガン移民の子持ち女性にこの話をすると、「でもアイデンティティの拠りどころが、そうやって子どもの親しみやすいところにあるだけ幸せよ」と言う。確かにMちゃんは、Yukikoが出始める前、ディズニーのお姫様雑誌をたまに買ってもらっては、中国が舞台の「ムーラン」に心を寄せていた。アメリカ製の妙ちきりんな東洋趣味に共感されるよりは、「犬夜叉」に登場する、日本の「ごく普通の女子中学生」のヒロイン日暮かごめに自己投影してくれるほうがずっとましかもしれない、と日本人母は思う。

外国人として生きる

日本でのムスリム

エルハジマブルク 友美（えるはじまぶるく ともみ）
大阪大学大学院言語文化研究科

ムスリム仲間との晩餐

京都の南のとある一軒家で、友人たちが集まって夕食を楽しんでいる。家の主は中古車部品の貿易業を経営するスーダン人女性。集まった仲間は、彼女の日本での学生時代からの友人で今は大学で教えるスーダン人男性と、彼女の同業者であるパキスタン人男性の一家、それにチュニジアからの留学生であるわたしの夫と日本人のわたし。彼らの共通項はムスリムであることと、日本で勉学や仕事に励んでいること。スーダン人男性いわく「自分の国を離れるという犠牲に見合う成功を収めないといけない。もし成功の青信号が見られないなら国に帰ったほうがましだ」。そんな張り詰めた生活の合間をぬって集まり、つかの間異国にいる寂しさを忘れ、話に花を咲かせる。日本での生活や家族のこと、自分の国について、ジョークとともに、そのほかの他愛ないことなど。話し出すと止まらないらしく、帰りが朝方になることもある。

ムスリム仲間との集まりなどで他に女性がいるときはわたしも参加する。男女とも、ある程度人数があるときは、男性陣と女性陣にわかれることが多いが、人数が少ないときは男女そろって食事を囲むことが多い。人が集まると食事を一緒にとることがほとんどで、普段はあまりしない少し手の込んだ郷土料理を作ったりする。自分の国でもそうなのか、異国で生活するうちに覚えたのかはわからないが、男性ももてなし料理を作ることが多い。

ムスリム同士交友し、食事をともにすることはイスラームで教えられ、人びとの習慣として息づいている。国や地域を越えて交友を広げられるのは海外生活ならではかもしれないが、彼らにはムスリムやアラブといった同胞意識がある。しかし、こうして集まる仲間も、留学生などで数年したら国に帰ってしまう人が多いので、入れ替わりが頻繁（ひんぱん）だ。

同郷人との交友

わたしの夫は、大学院で経済学を学んでいる。日本への留学が決まった四年前は、在チュニジア日本大使館のロビーで人びとが話す日本語を耳にし、自分がこの不思議なことばを話す様子を想像して笑ってしまったというが、今では日本語もすっかり上達した。チュニジアと日本はお互い遠い国のようだ。関西に住むチュニジア人は、わりと顔の広い夫の知るところで、二〇人程度。来日した当初は日本での生活になじめず、国に帰りたい気持ちをつのらせたという。そんななか、ムスリム仲間、アルジェリアやチュニジアやモロッコといったマグレブ地域の仲間との交友は彼にとってとても大切なものだったし、今でもそうだ。

マグレブ地域の仲間との集まりは、同郷人同士だからこそわかり合えるジョークや慣れ親しんだ方言でのおしゃべりを楽しみ、リラックスできる場らしい。家族ぐるみのつきあいのほか、街中のコーヒーショップで男性だけで集まることも多く、夜も遅くなるまで話し込む。

男性だけの集まりにはわたしは参加できない。チュニジアでも同様で、夫の故郷の小さな町のコーヒーショップは連夜男性だけで賑わっていた。夏場はとくに海外に出ている人たちが里帰りしているので活気が加わり、日中の暑さからやっと開放された人たちは、水タバコをふかしながら夜がふけるのも忘れて話に興じる。日本でのコーヒーショップの集まりはさながら自国のコーヒーショップ文化の延長だ。ちなみにコーヒーショップでしか会わない男性たちの奥さんは日本人も多いようだが、奥さん同士はモスクなど他の場で会わない限り面識がない。

日本での同郷人同士のつながりは、国や地域が違ったり、つきあいもごく短かかったりするので、故郷の町の人びとの安心感とは違うようだが、異国にいる者同士その精神的な位置付けは大きいように思われる。

大学院の卒業式で同級生と

スーダン人女性宅での晩餐

神戸モスクの結婚式でお祈りをする

日本の友人宅でチュニジア人の友人と水タバコを

研修で移動中の夫

誘惑の多い国で

日本に住むムスリムにとって信仰の維持はひとつの課題だ。外国から来る若いムスリム男性にとって、イスラームの禁止する婚外での女性関係に対して日本での生活は誘惑がとても大きいという。それを避けるために早く結婚する人もある。夫とわたしはたまたまモスクの前で知り合った。わたしはすでにイスラームに改宗していたから、そのまま結婚に向けて話がはじまった。「日本に来てまだ短いではないか」と言う両親に対して、「日本にいてもムスリムらしい生活を送ることを希望するから、早く結婚をしたい」と答え、驚かれていたのを思い出す。

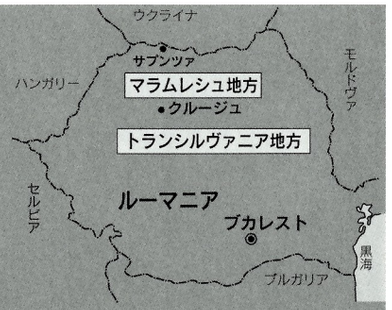
日本での研究をめざし、日本人や留学生などの外国人仲間と交友し、日本食や物質的にめぐまれた便利な日本での生活に親しむ一方で、自国での習慣やムスリムとしての生活を維持していくことは、夫にとって大切なことである。その生活の営みはたくさんの選択、奮闘に満ちていて、傍らにいてもわかっているようでわかりきれないことがたくさんあるだろう。

地球を集める

聖母マリアとヒツジたち

新免 光比呂
（しんめん みつひろ）

本館民族文化研究部



一九九五年夏、文部省（当時）の「在外研究若手派遣」によってルーマニアに滞在中のわたしは、トランシルヴァニア地方の都市クルージュで本館から派遣された四人の海外映像資料取材チームを迎えた。取材チームの目的は、ビデオテーク用番組および「ものの広場」展示のためにルーマニアの映像資料を作成することであった。

そのために、以下四つの主題を定めて撮影することとなった。まず聖母マリアのイコンが涙を流したとされることで知られ、またガラスイコンの製作の中心地としても有名なニクラ修道院の聖母就寝祭。次にマラムレシュ地方サプンツァ村における機織りと生活。第三に、ウクライナ国境に沿ったマラムレシュ山地の夏の放牧地における羊飼いの生活。第四に伝統的民族文化の宝庫といわれるマラムレシュ地方の村々における生活の変化である。

通信手段の不備と気質の違い

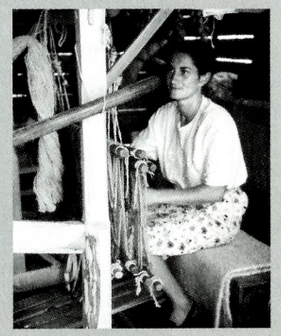
わたしの滞在は四月にすでにはじまっており、取材チームが到着するまでには大体の段取りができていた。しかし、撮影取材の期日はほぼ四週間と限られているのに移動の距離は数百キロメートルにおよぶ。当然、細かなスケジュール調整が必要である。ところが、当時ルーマニアにおける通信手段はお粗末なもので、電話がまったくもって役に立たない。最初に撮影するニクラ修道院はクルージュから自動車で一時間半のところだったが、電話の通話状態が悪く、ひどいときにはつながらないので、細かい打ち合わせのために出かけていく必要があった。さらにマラムレシュ地方との電話連絡もよく聞きとれなくて、夏の放牧地に関する打ち合わせやサプンツァ村での機織りをどのようにするか詳細を詰めることがむずかしかった。結局、正確さを期してわざわざマラムレシュまで足を運ばざるをえなかった。

問題は、通信手段ばかりではない。われわれと現地の人びととの気質の違いも撮影の段取りに反映した。たとえば、ニクラ修道院での聖母就寝祭の撮影の際には、行事がどのように進行するのか、なかなかつかめなかった。修道院の関係者に進行について質問するのだが、わたしの理解力の不足か、いったい何時にどこでミサがあり、説教がおこなわれるのかがわからない。後に何時何分という質問が無意味であることを学習するのであるが、それはまだ先のことだった。進行がわからないままに巡礼の人びとは増え続ける。結局、撮影の三日間、ひたすら修道院の内外を次に何をおこなうのか尋ねながら走り回ることになった。

放牧地での出会いと事件

一方、国境沿いの夏の放牧地の撮影では、すばらしい体験をさせてもらった。

ニクラ修道院の宝である聖母子のイコン。1694年、21日間にわたって聖母の目から涙が流れたという


サプンツァ村での機織りの様子。スタンク氏のご家族が協力してくださった

ヒツジの放牧地はかなりの急斜面である。羊飼いたちは杖を休息ばかりでなく獣を追い払うためにも用いる

ニクラ修道院の全景。山の中腹に修道士たちの生活する建物と屋外礼拝所、教会堂が並び建つ

ぞくぞくと集まる巡礼者たち。村ごとに教会の旗を立て聖母をたたえる歌を口ずさみながら到着する

一日の撮影が終わり、みなが眠りについて夜も更けたころ、突然、羊飼いたちが杖を手に山小屋を飛び出していく。外では牧羊犬たちが狂ったように吠えたてる。しばらくして戻ってきた羊飼いの人たちに何が起きたのか尋ねると、こともなげにオオカミかクマがきたという。夕方、撮影隊のテントの周りにどう猛な牧羊犬をつないだのはクマが来るからということだったが、それが本当になってしまった。

放牧地での羊飼いたちの生活は厳しい。早朝から深夜までヒツジの世話、チーズ作りに追われる毎日である。食事も単調で楽しみにかける。しかし、羊飼いたちはじつにさわやかで気持ちの良い男たちだった。とくに牧童頭はたくましく決断力に富み、ユーモアにあふれていて、取材のあいだもいつも笑わせてくれた。

放牧地での撮影が終わり、われわれはサプンツァ村の機織りとマラムレシュ地方の生活の撮影のために村に戻った。そしてある日、村の路上でヒツジを山からつれて戻った彼らに偶然再会した。ヒツジの首に付けた鈴をならしながら、群れは村のなかを抜けていく。すると突然「Să trăiți domnul Hiro.（ごきげんよう ヒロさん）」という声が響き渡る。なつかしい牧童頭の声である。わずか二日ばかりの取材で生活をともにしただけだったが、何故か胸にせまるものがあった。

忘れられない人びと

終わってみれば、戦場のような四週間だった。今とは違い、貴重な撮影機材はかさばり重い。一六ミリの撮影フィルムで撮影できるのは一本のリールで一五分だけ。そのリールをとり替えるには、撮影の進行中でも光を遮る袋のなかに手を入れ手探りでフィルムを交換しなければならない。二人のカメラマンの方たちは大変な重労働をしてくださったように思う。また音声も担当した制作の方も撮影のたびにカメラを追いかけるばかりでなく、ブカレストからの往復を含めて一〇〇〇キロメートル以上運転しなければならなかった。さらにプロデューサーの方は取材の混乱のなかでもスタッフのストレスをうけとめながら撮影の方向を導いてくださった。

現地の多くの人びとにもお世話になった。トランシルヴァニア民俗博物館館長ティベリウ・グラウル氏、シゲット民俗博物館館長ミハイ・ダンクーシ氏、ニクラ修道院院長ポップ師、イラリオン司祭、カシアヌ司祭、夏の放牧地ではペトロ氏、サプンツァ村ではドゥミトルとイリナのスタンクご夫妻、ヴォグダン・ヴォーダ村ではマリシュ一家に助けて頂いた。撮影から一〇年以上がすぎたが、一人一人の顔は今も忘れることができない。

生きもの博物誌

【ノウサギ】
日本

ウサギのいる風景

田口 洋美
（たぐち ひろみ）

東北芸術工科大学教授

危うい存在

「ウサギ追いしかの山、小鮒釣りしかの川…」名曲である童謡「ふるさと」は、自然環境に恵まれていた古の長閑な田園風景を人びとに想起させる。しかし、それは現代を生きるわたしたちのノスタルジーに過ぎない。「ふるさと」が尋常小学校児童用の唱歌として採用されたのは大正三（一九一四）年のことである。この年、ヨーロッパでは第一次世界大戦が勃発した。そして、子どもたちが故郷の山々でウサギを追っていた風景は、この戦争と無縁ではなかった。

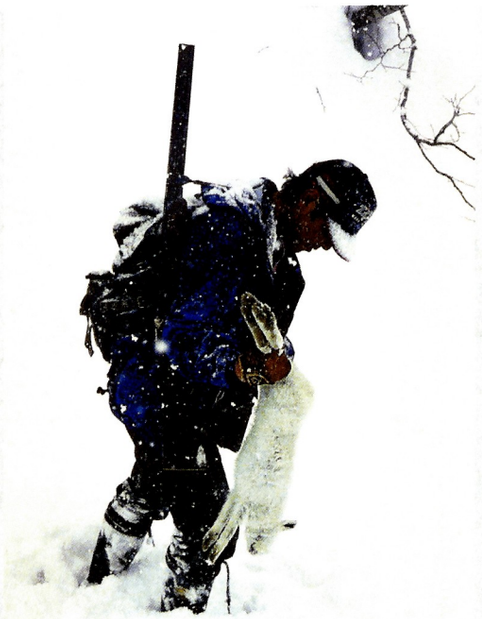
十数年前までノウサギたちは僕たちの日常の周辺を撥（は）ね、疾走していた。例え海浜の砂防林のなかであっても、ノウサギたちが疾走する姿を当たり前のように見かけることができた。林床に干からびたノウサギたちの丸い糞が散乱し、細かく見て歩けば食痕すら見つけることができた。ノウサギたちは山里だけに棲んでいたのではなかった。しかしその身近さゆえに、クマなどと違って存在にインパクトがなく、彼らに向けられる視線はきわめて希薄だった。研究という視点から見てもノウサギの生態に関する研究事例はほとんど見られない。また動物保護運動においても中小型動物に対する扱いはとても気まぐれであり、アマミノクロウサギほどに過熱する例はめずらしい。そこにノウサギたちの危うさがある。

軍需利用の犠牲に

かつて、ノウサギは近代日本の外貨獲得のための欧米向け毛皮として、あるいは大陸の寒冷地に進出した軍部の兵員用防寒毛皮として乱獲された時代があった。とりわけ昭和一二年ごろから二〇年にかけて、軍需用防寒毛皮として陸海軍部によって全国のウサギ飼育農家や地域の猟友会からウサギの毛皮が収集された。その数、年間一〇〇万枚。大日本猟友会の資料によると、例年の捕獲数は六〇～七〇万羽であったものが戦時体制下の軍部主導による統制狩猟に入った段階で一〇〇万羽を超え、戦前まで頻発していたノウサギによる農作物被害は皆無となったと記されている。日中戦争から太平洋戦争にかけては、戦闘機のパイロットたちが身に付けていた飛行帽や手袋の内張り、陸海軍の将校たちの防寒コートの襟や内張りは、ノウサギあるいは飼育ウサギの毛皮を使用していた。さらに、ウサギ肉は軍事工廠（こうしょう）の労働者や兵員用の食糧として缶詰などに利用され、貧窮していた都市住民の食糧とされた。ノウサギたちは、この国の近代黎明期の経済と食を支えてくれたのである。わたしたちは誰しもがこの恩恵を受けている。

日本から欧米へとウサギ毛皮が輸出されはじめた明治から大正にかけての外貨獲得の時代、ウサギ飼育が農山村の副業として国家から奨励され、また地方の野山では軍によって狩猟が奨励され児童生徒までかり出されて盛んにノウサギ狩りが実施された。戦争は人間の悲劇として語られるが、その裏で軍需利用の犠牲となっていった野生動物の数は全世界的に見れば天文学的数字になるだろう。人間という動物は業が深い生き物なのである。童謡に唄われたウサギ追いしかの山の風景は、近代の経済発展と戦争という光と影がつくり出した風景であり、決して牧歌的なものではなかったのである。

大学のフィールドワーク演習で狩りに参加（山形県小国町）



単独でおこなう忍び猟（山形県小国町）

昭和18年の実猟大会。軍事用防寒毛皮のために、猟師には捕獲ノルマがあった（写真は静岡県駿東郡小山町提供）

ブナやミズナラの林のなかに残されたウサギの足跡（長野県秋山郷）

ノウサギ（学名：*Hares*）

ウサギ科は大きくアナウサギ（*rabbits*）とノウサギにわけられるが、日本にはおもにノウサギの仲間が生息している。北海道に生息するエゾユキウサギや氷河期の生き残りと言われる小柄なエゾナキウサギ、奄美大島だけに生息し生きた化石とよばれるアマミノクロウサギ、そして一般に知られたニホンノウサギ（トウホクノウサギ・キュウシュウノウサギ・サドノウサギ・オキノウサギなどに分類される）がいる。ニホンノウサギは茶褐色の体毛（夏毛）から白色（冬毛）へと季節によって毛色を変化させる。

赤い土、白い砂、青い陶器

菊田 悠（きくた はるか）
北海道大学スラブ研究センター研究員

青い陶器の町

ユーラシア大陸の中央部、ウズベキスタン共和国の東部には青い陶器の町がある。その名はリシトン。古くから陶器の産地として有名で、一説では一〇〇〇年近くむかしから陶芸がおこなわれていたという。現在も約三万人の人口のうち数千人が陶芸関係の仕事で生計を立てている。白い下地に草花や鳥などの絵柄を鮮やかなコバルトブルーの顔料で描いたものが、リシトン陶器の伝統的なスタイルとしてよく知られている。

町には腕の良い親方たちが八〇人ほどいて、この伝統にそれぞれの個性を加えたユニークな製品を生み出している。彼らのあいだでは親方と弟子の密接な徒弟関係があり、陶芸に関するさまざまな物語が語り継がれてきた。その一端をご紹介しよう。

赤い土の尊さ

陶芸において大切なものは何か？それはまず、陶土だろう。リシトンの地下一メートル付近には良質の陶土があり、焼くと赤くなることから「赤い土」とよばれている。

町でいちばんの陶工といわれた故コミーロフ親方は、「この土を手にとって仕事を始めるときには『神の御名において（ビスミッ＝ラーヒッ＝ラフモーニッ＝ラヒーム）』と言わなければいけないよ」と語っていた。その理由は、「赤い土」は人間からできているからだという。親方曰く「この世にはとても古い歴史があって、人が何人も来ては去り、土に還っていっただろう。土にいったいどのような人間が眠っていたのか、偉人だったか泥棒だったか誰にもわからない。その土を陶工が何回も細かくして陶器にしてきた。だから『神の御名において』と言って仕事を始めなければいけないんだよ」。「赤い土」への深い尊敬を感じることばだと思う。

親方はこうも語っていた。「たとえ陶器が失敗作になってしまっても、怒ってはならない。陶土に悪口を言ってはいけない。それはきっと悪い人間の土だったからで、悪い人間は陶器になることも嫌がったのだろうから、仕方ないのだ」。

白い砂に描くもの

こうして大切に成形した「赤い土」の表面には、リシトン近郊の川から採った「白い砂」を塗って焼く。「白い砂」は石英で、赤い器体もこれで覆うと白く焼きあがる。その白色の地があるからこそ、コバルトブルーの絵が映えるのだ。

コミーロフ親方は陶土の成形も上手だったが、代々リシトン陶工に伝えられてきた数多くの文様に詳しく、それを独特の素朴さで描くことでも有名だった。つぼや大皿、碗に描かれたさまざまな文様を指して尋ねると、そこに込められた意味を教えてくれたものである。たとえばリシトン陶器の伝統的なモチーフとして、水差しがある。それは水の貴重なこの地域において、命の源である水の大切さと人生を意味するという。

ただしもうひとつの説もある。ウズベキスタンでは客へのもてなしにピラフを料理することが多い。大皿で客にピラフをふるまった後、ピラフの下から見えてきた水差しの絵を見て、主人が「では汚れた手を洗ってください」と水差しを出すのを忘れないように、というのである。冗談のようでもあるが、日本で寿司は手で食べた方がおいしいと言うようにウズベキスタンではピラフは手で食べるのが王道だから、食後に油まみれになった手を洗う水差しは確かにありがたいもてなしだ。

花もよく描かれる。これはこの世の美しさを表現したといわれる。十字の各端に花を添えた文様は、世界の東西南北どの地域にも、それぞれにふさわしい美しさや暮らしがあることを意味するのだという。「昔の陶工はリシトンから大して遠くまで行かなかったかもしれないが、それでも工房で世界の美に想いを馳せて花を描いたのさ」と親方は言っていた。また、裏返しの小刀という変わったモチーフもある。それは「刀を置いた状態」つまり平和を表現しているのだという。さまざまな勢力が栄枯盛衰を重ねたこの地域で、陶工のような職人や一般庶民は、平和の大切さを切に感じていたことだろう。

陶工の誇りを胸に

リシトン陶芸は今、大きな変化の時代を迎えている。一九九一年に旧ソヴィエト連邦からウズベキスタンが独立し、それまでの社会主義から資本主義的な市場経済へと転換したことで、陶工間の競争が激化しているのである。これにより親方と弟子の徒弟関係も一部では崩れつつある。また、地元の「赤い土」を用いた青い陶器ではなく、遠くから運んできた別の土で磁器を焼く人も増えている。手描きで繊細な陶器よりも、シンプルな磁器の大量生産のほうが手っ取り早く稼げるからだ。

だが、コミーロフさんの遺志を継いだ親方たちは青い陶器の伝統を絶やすまいと努力している。彼らは陶芸を単なる生計の手段としてではなく、祖先から伝えられてきた貴重な技能ととらえているのである。コミーロフ親方は「手工業のなかでも、人間の生活の始まりからあるのがこの陶芸に違いない。裸で歩くことはできても、食事とそのための食器は欠かせないからだ」と言っていた。そして「清らかなものだけを飲み食いするという魚も、陶工が落としたパンのかけらならば喜んで食べる」という。人の体だった土を成形して焼く陶工は、そこまで清らかで正しく生きなければならないということだ。陶芸は繊細な職能なんだよ」と弟子たちに教えていた。この強い誇りこそが、今もリシトンの青い陶器作りを支えているのだろう。

国内のバザールでは
シンプルで丈夫な磁器が今の売れ筋

ユルダシェフ親方は
コミーロフ親方の一番弟子

親方と弟子たち

自慢の作品を前に

在りし日のコミーロフ親方
（1928－2003）

開館30周年記念事業

みんぱく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう

開館30周年の記念として、来館者のみなさんとより身近に語り合いながら、民博の研究を知っていただくイベントを1年間おこなっていきます。

研究部の全員が週末ごとに1人ずつ、展示場のどこかに登場します。それぞれの持ちネタ（研究成果）は、千差万別。

休日の午後、博物館へお話の花を咲かせにいらっしゃいませんか。

説法台（東南アジア展示）

岩壁画（オセアニア展示）

■時間：14:30～15:00　■場所：常設展示場内　各所

■参加費：無料（ただし、常設展観覧料が必要）

＊ 毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。
ただし、自然文化園を通行して来館される場合は、自然文化園の入園料が必要です。

実施日・話者・話題

4月28日（土）
田村 克己（副館長・民族社会研究部教授）
「東南アジアの30年」

4月29日（日）
松山 利夫（民族社会研究部教授）
「岩壁画を語る」

4月30日（月）
岸上 伸啓（先端人類科学研究部教授）
「北極の春」

5月3日（木）
鈴木 七美（先端人類科学研究部教授）
「アメリカ南部移民のハーブガーデンが語るもの」

5月4日（金）
野林 厚志（文化資源研究センター准教授）
「家畜にもみどりを」

5月6日（日）
韓　福眞（外国人客員教授）
「韓国の時節食―端午節によせて―」

※以後の予定は、ホームページ等でお知らせします。

編集後記

この編集後記を書いている4月のはじめ、民博ではあちらこちらで工事の音が鳴り止まない。来館者と関係のある部分では、すでにお気づきの方もおいでだと思うが、2階展示場入り口へのイントロダクションコーナーの敷設と民博外側正面のエントランス部分の改修がある。後者は、エントランス付近の段差をなくすバリアフリー化と二つの出入り口を結んでいた立派なひさしの撤去工事をおこなっている。このひさしは数年前、雨が降った際の来館者の便を考え少額でない金をつぎ込み作ったものだが、正面の美観をそこね、あまり役に立っていないということで撤去されることになった。今秋、30周年をむかえる民博だが、今も試行錯誤を繰り返しながら、来館者の利便や時代の要請にこたえうる博物館をめざしている。

じつは、今お手元にある『月刊みんぱく』も同様に体裁や構成の改修を繰りかえしてきている。5月号では、今年度からの新企画である、「地球ミュージアム紀行」「モノ・グラフ」が出揃うことになる。前者は執筆者が民博のスタッフ中心となり、後者は民博のモノを扱う予定である。民博を今まで以上に身近に感じていただければ幸いである。（庄司博史）

交通案内

■大阪・千里万博記念公園内

●大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分（茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。

●自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

月刊みんぱく

次号予告／6月号特集
ペット

2007年5月号　第31巻第5号通巻第356号　2007年5月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人　朝倉敏夫

編集委員　池谷和信（編集長）　樫永真佐夫
久保正敏　庄司博史　山中由里子

協力　財団法人 千里文化財団

制作　株式会社博報堂

製版・印刷　アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます